《本号の表紙絵》

田原淳著『哺乳動物心臓の刺激伝導系』の校正図版

田原淳（1873–1952）は大分県東国東郡西安岐村瀬戸田（現安岐町）に生まれ，後に母方の親戚筋である中津の医師田原春塘の養子となる．1901 年に東京帝国大学医学部を卒業．その 2 年後に私費で渡独し，マールブルク大学のアショフ教授（Ludwig Aschoff, 1866–1942）のもとで心臓の病理解剖に取り組む．1905 年，後に「田原結節」や「田原・アショフ結節」と呼ばれるようになる「房室結節」を発見し，その成果を『Das Reizleitungssystem des Säugetierherzens. Eine Anatomisch-Histologische Studie über das Atrioventrikularbündel und die Purkinjeschen Fäden』（哺乳動物心臓の刺激伝導系—房室束とプルキンエ線維の解剖学的・組織学的研究）と題して発表する．帰国後，福岡医科大学（現九州大学医学部）病理学教室の助教授となり，1908 年教授に就任．1932 年，九州帝国大学温泉治療学研究所（別府市）の初代所長となる．1934 年に定年退官．

『哺乳動物心臓の刺激伝導系』の刊行を進めていたフィッシャー社は，テキストの印刷をケンプフェ（Kämpfe）印刷所に依頼したが，心臓を詳細で立体的に見せるため，ミュンヘンのオーバーメター（J. B. Obermetter）社の「クレヨン法」（Crayon Manner Engraving）という特殊技術を採用した．試し刷りの校正に用いられたトレーシングペーパーには，田原によるきめ細かい指示がびっしりと書き込まれ，刺激伝導系の難解さとともに田原の几帳面で根気強い一面を伝えている．

この校正図版は大分県中津市大江医家史料館に展示されている（村山家寄託資料）．

（ヴォルフガング・ミヒェル）